

俳句 紫溟吟社運座吟（九月二十二日）：文苑

著者	?耳，渭南，紅鱒，桔槔，對泉，一波，露葉，巨足，岸三，霞湖，北川，瓢郎，戰車，不割石，弓足
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 7
ページ	4 8 - 4 9
発行年	1906
URL	http://hdl.handle.net/2298/5982

紫浪吟社運座吟 (九月二十二日)

芒

山閉ぢて小幟残る芒かな

綠耳

板垣に芒一株のびつくす

全人

石塔のぐるりの芒刈りにけり

渭南

蜻蛉

赤蜻蛉法事に乾菓子配りけり

紅鱗

蜻蛉とぶ野良を戻りの晝下り

桔槔

粟ひきの畑に多き蜻蛉かな

對泉

やな落ちて蜻蛉とぶ瀬の水淺き

一波

蜻蛉來て歸りて秋の夕日かな

露葉

黄昏れてちらちら黒き蜻蛉哉

巨足

花野烟突や花野に遠き川の口

岸三

白牛の花野の中に眠りけり

霞湖

花野原小さき鳥居祠哉

北川

強ひられて乗りぬ花野の戻り馬

瓢耶

角力

足跡を見て引下る角力かな

巨足

瘦角力風のまにまに泳ぎけり

戰車

宮相撲兄弟關を取りにけり

綠耳

仰向いて鬚の砂振る角力かな

紅鱗

秋の雲

雲の秋麓の茶屋に日のくるゝ

不割石

秋の雲此の朝富士に雪を見る

紅鱗

箕踞洞席上吟 (九月二十三日)

屋根高く鶏頭越えて鶏さはぐ

戰車

宇治興聖寺

石徑に秋の螢を拾ひけり

全人

鶏頭花地嶽極樂生人形

對泉

下駄の齒や秋の螢の草の底

紅鱗

秋晴を榎境の二村かな

巨足

箕踞洞席上吟 (九月三十日)

初潮

初潮や法華の寺に太鼓叩く

戰車

初潮や椽の柱に舟つなぐ

瓢耶

初潮の寒き廊をめぐりけり

巨足

初潮や濱萩月にくもりたる

全人

燈籠

くわらくわらと燈籠上げて仰き鳧

紅鱧

燈籠や夜風の燦る紙の房

全人

燈籠や波なき海に流れ出る

綠耳

吹さけしてしばらく廻る燈籠哉

巨足

廻り燈籠灯ともさせて買うて行く

戰車

廻り燈籠馬が出て聽て人が出る

全人

並べつるす燈籠はためく宵の風

瓢郎

蚯蚓鳴く

稽古矢を繕ふ宵や蚯蚓なく

不割石

母屋から湯加減問ふや蚯蚓なく

全人

命毛のきれよくと蚯蚓なく

紅鱧

鱸さげて行く夜の道を蚯蚓なく

互足

施餓鬼すと雑草刈つて蚯蚓なく

戰車

夕顔は小さうなりてみよすなく

全人

